
池に映るみらい

よしき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

池に映るみらい

【Nコード】

N9202B

【作者名】

よしき

【あらすじ】

みらいは誰からも見えない少女。でも何故か僕には彼女が見えた。そして、少しずつ言葉を、心を、交わしていく僕達。

その1

「私って、何なんだろうね？」

彼女は空に向かってそう言った。

悲しそうな、何かを諦めてしまったような顔。
水城みらい。

彼女に出会ったのは一月ほど前だった。

街の交差点で自分を見て欲しいと、訴える彼女。

みらいは誰にも見えていなかった。

声も聞こえていなかったのだ。

でも、僕には彼女が見えた。

声が聞こえてしまった。

自分の姿が僕に見えている事に気が付いた彼女は、僕の後をとぼとぼと付いて来る。

「ねえ、待ってよ。少しくらい話を聞いてよ。」
立ち止まって振り返る。

彼女は泣きながら訴えかける。

「お願い。私の声を聞いて…。」

僕はため息をつく。

「聞こえてるから、勝手に話せばいいだろ。」

幽霊ってやつだろうか？

見るのは初めてだったが、付きまとわれて迷惑も甚だしい。別に相手をするつもりもなかった。

「誰かと話しがしたかったの…。だから、だから…。」

彼女はしくしくと泣き出してしまう。

「で、何を聞いて欲しいの？」

腕を組み彼女の反応を待つ。

涙を拭きながら彼女は困ったような顔をする。

「…だから、私の話を。」

「それは分かった。だから何の話だよ。」

「えっと、それは…。」

困り顔の彼女にため息をつく。

「未練があるから、幽霊になったんじゃないのか？」

「違う、私幽霊じゃない！」

自分が死んだって自覚してないのか？

「人から見えないだけで、私生きてるの！」

彼女の話しは要領を得ない。

これ以上話しても無駄だと感じた僕は背を向ける。

こんな厄介事はごめんだ。

「だから、その話を聞いて欲しいの！」

そう言いながら彼女は勝手に僕の後を付いて来た。

毎日毎日付きまとい話を聞いて欲しいと訴える幽霊。

寝る時ですら窓の下からその声を聞かされる羽目になった。

僕は彼女のその攻撃に2日しか持たなかった。

玄関ドアを開けてやる。

このままノイローゼになるよりはましだと判断したからだ。

仕方なく部屋に上げ座らせる。

「好きなだけ話せばいいよ。聞ってるから。」

彼女はこくと頷く。

名前は水城みらい。

都内の聖花女子高校に通っていたらしい。

そしてある日を境に誰からも見えなくなってしまった。

でも、死んだわけじゃないと強調する。

姿が見えず、声も届かない。

いきなりそんな体になってしまったのだと言う。

物を掴むことは出来ない。

人にぶつかればすり抜けてしまうが、その瞬間自我を失ってしまうらしく物体の通り抜けは生理的に受け付けないらしい。

両親は行方不明になったと信じ、毎日泣いて暮らしている。

そんな家に嫌気がさして飛び出してきたが、誰とも話が出来ない孤独感から、ああやって群集に訴えかけていたと言う。

彼女はそんな事をぶちまけるように話すとまた泣き出してしまった。

「分かった。話し相手になってやるよ。」

「ほんと？」

涙を拭いて顔を上げる。

「ああ。ただし、プライベートは尊重する事。守れなかったら二度と君の話しは聞かない。」

彼女は真剣な眼差しで頷く。

そして、みらいって呼んで、と笑った。

その2

それから暇な時にみらいと話すようになった。

始めは原因を探すのに躍起になっていたみらいも、しだいにその事を口にしなくなる。

何処を調べても、何の原因すら見つからなかったから。

そして、自分のこと、趣味や自分の好きな事について話すようになった。

音楽やスポーツ。

学校の事。

でも、彼女の話しはいつも過去形だった。

前にね。

そんなふうにしか始まらない話し。

誰にも見えない。

誰とも（僕以外と）話しをしない。

それだけでみらいの時間は止まってしまったかのようだ。

今ではそのみらい、という名前も皮肉に思えてくる。

彼女は世界に対して何も出来ない存在なのだ。

でも、僕は感謝していた。

口には出さないけれど、そう思っていた。

僕は昔から人と話すのが苦手だった。

うまく伝える事が出来ない自分が苛立たしいのだ。

でも、みらいは僕の言葉をいつまでも待っている。

誰かとお話できるのが嬉しい、と言う。

僕は拙い言葉で彼女に話す。

上手くいえない事の方が多かったけれど、彼女が笑ってくれた時、ごく嬉しかった。そう。

すごく、嬉しかったんだ。

今日はみらいと一緒に初めて出かけた。

大きな池のある公園を歩いた。

始めは楽しそうにしていたみらいも、池に架かる橋の上にきた時、少し寂しそうな顔をした。

「私って、何なんだろうね？」

彼女は空に向かってそう言った。

僕は何も言わずに水面を眺める。

噴水を避けるように水鳥が泳いでいく。

「何で君にしか見えないんだろう…？」

今度は僕の目を見る。

「何でだろうね…。」

暖かい日差しが彼女を包むけれど、その光は心までは照らしてはくれない。

みらいの悲しそうな顔が、僕には寂しかった。

「案外、僕も同じ様なものだったりして…。」

そう言々とみらいは首を振る。

「違う。君はちゃんと今を生きてる。私とは違って…。」

自分の中で未消化な言葉を飲み込む。

「そう。私は多分、この世界に拒絶されているから。私とは違うよ…。」

「でもみらいと話ができる事に何か意味があるんだと思う。」

僕は彼女の言葉を否定する。

「僕は、みらいと話が出来て、その、…良かったと思ってる。」

みらいは手すりにもたれ水面を眺める。

しばらくそうしてから、ありがとうと笑って言った。

穏やかな午後の公園を風が抜けていく。

楽しそうな親子連れやカップルが通り過ぎていく。

何も言わず、池の水面を眺めた。

暖かな日差しの中で。

何も言わないで。

その3

「見てて。面白い事発見したんだ。」

みらいは池の周りに張り巡らされた低い柵をまたいで越えていく。彼女の体が空中にふわりと舞い、池に浮かんだ一枚の落ち葉に足をつく。

大きな目の葉は沈む事無くみらいの体を水面に浮かべる。

みらいの足が水を蹴る。

水しぶきが光を反射しながら舞う。

すると彼女ごと葉は水面を滑っていった。

水面に波紋と軌跡を残しながら。

「みらい！」

危なげな彼女に声をかけると、振り返って手を振る。

そしてアイススケートのように滑っていつてしまう。

僕は彼女を見守る。

池の向こう側へと大きく回りながら。

噴水をくぐり抜ける。

髪にしぶきを纏い風に乗る。

鳥と並んで滑ってゆく。

翼と風に翻弄されながら。

ターン。

クルクルと波紋をおこしながら。

戻ってきたながら僕に手を振る。

微笑みは今までに見たことの無い輝きを放つ。

眩しさに目を細めながら。

僕はそれに手を上げて答える。

みらいは水面を回る。
クルクルと回り波紋が広がっていく。
光の中を。
水しぶきの中を。
みらいは踊るように滑走してゆく。
誰にも見えない。
僕にしか見えない。
こんなにも綺麗な。
息をする事も忘れるような。
煌く午後の一瞬。

池に映るみらい。
風と踊るみらい。
僕達がこれからどうなるのかなんて、全然想像もつかない。
みらいの未来。
僕の未来。
それすらも、何も…。
…。
でも。
この幸せな瞬間はここにある。
僕達が確かにここにいる。
みらいは踊る。
光り輝く水面を。
僕は目を細め、ただ見つめる。
水面に映る綺麗なみらいを。
きれいな。

綺麗な未来をただ見つめていた。

< 終 >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9202b/>

池に映るみらい

2011年1月19日00時37分発行